大学生の浮浪者観

Images about Homeless People; on research of university students

矢島正見
Masami Yajima

第1章　問題の所在と調査目的、調査概要

［1］問題の所在

青木秀男は「都市の漂流者」（『ソシオロジ』29-2，1984，1-25頁）のなかで、野宿者に対するラベリングを説明する逸脱規定として、<怠惰性><不浄性><漂流性>という3概念を提示した。これら3概念は野宿者をラベリングする際の理解の仕方、もしくは了解概念として位置づけられるものである。

<怠惰性>という逸脱規定においては、「野宿者は、聖なる勤勉と労働の価値からの逸脱者である。その<怠惰性>は、許し難い」となる。つまり、「労働」という価値に基づき、一般の人びとを「勤勉・勤労」と了解し、野宿者を「怠惰」と了解するわけである。そしてさらに、この了解より、野宿者に対して具体的な「怠けもん」「ぐうたら」「飲んだくれ」といったラベリングを付与するとみるのである。

<不浄性>という逸脱規定においては、「野宿者は、純粋と美の価値の逸脱者である。その<不浄性>は、許し難い」となる。つまり、「純粋と美」の価値に基づき、一般の人びとを「清浄」野宿者を「不浄」と了解するわけである。そしてこの了解により、野宿者に対して具体的な「汚い」「臭い」「不潔」「気持悪い」といったラベリングを付与するとみるのである。

<漂流性>という逸脱規定においては、「野宿者は、社会の聖なる秩序価値の逸脱者である。その<漂流性>は、許し難い」となる。つまり、「秩序」という価値に基づき、一般の人びとを「秩序を守る人」、野宿者を「秩序を乱す者」と了解するわけである。そしてこの了解により、野宿者に対して具体的な「流れもん」「やどなし」「よそもん」といったラベリングを付与する、というのである。

これら3概念は人びとの野宿者観を分析するにあたって、きわめて有効な概念と思える。しかし「野宿者の内面世界（意味世界）を垣間見ずして野宿者差別の構造をあきらかにしたことにはならない。」（12頁）と述べているように、氏の立場は野宿者側にあり、氏の考察は野宿者の意味世界の考察および野宿者の視点からの人びとの野宿者観（差別）の考察である。それゆえ逆に、野宿者の内面世界（意味世界）を垣間見ただけでは野宿者差別の構造は分からない、というパラドックスが生じる。つまり、内からの視点と外からの視点の2つがどうしても必要なのである。

青木は内からの視点で野宿者のラベリングと逸脱規定を問題にしたが、本稿では外からの視点、言い換えるならば、野宿者をラベリングする人びとの野宿者観を問題にする。青木が提示した3概念に基づき、人びとはいかなる野宿者観を抱いているのか、また社会に存在する価値観と野宿者観とはどのような関連があるのかを、調査データにより、実証的に考察していくのである。

しかしその際、青木の提示した3概念をいくらか修正しなくてはならない。

第1に<不浄性>という概念である。氏は「純粋と美の価値」からの逸脱として<不浄性>を提示し、野宿者を<ケガレ>の存在として位置づけているが、一般の人びとは<不浄>とか<ケガレ>といったような精神的次元もしくは聖的次元で野宿者を観ているのではなく、生理的にもしくは皮膚感覚的に観ているのではないかと思えるのである。野宿者に対しての嫌悪は<不浄>や<ケガレ>へと抽象化しえない、もっと低俗な、どろどろと

した感覚で、それは、清潔社会のなかで汚いものに対して抱く嫌悪としか言いようのない代物ではないかと思えるのである。したがって、<不浄性>という概念は<不潔性>という概念に置き換えた方がより実態を把握できると思えるのである。よって本稿では<不潔性>という概念を用いることにする。なお、<不潔性>を、「清潔社会」における「清潔価値」に基づいて、野宿者を「不潔視」する際の規定要素と定める。

第2は<漂流性>という概念である。青木は野宿者を<オソレ>の存在と位置づけているが、わざわざカタカナで表現したのは、そこに聖的な意味合いを付与するがためであろう。しかし、人びとが野宿者を恐れるのは、「聖なるものへの恐れ」とは全く異なり、ただ単に「得体の知れないやつ」「何をしでかすか分らないやつ」というにすぎない。したがって本稿では<オソレ>を<恐れ>とし、<漂流性>を「秩序社会」における「秩序価値」に基づいて、野宿者を「恐れ視」する際の規定要素と定める。

なお、<怠惰性>に関しては、本稿では「勤労社会」における「勤労価値」に基づいて、野宿者を「怠惰視」する際の規定要素と定める。

そこで本稿では野宿者観の構成要素として<不潔性><漂流性><怠惰性>を提示し、それらの具現的表出として「不潔視」「恐れ視」「怠惰視」を提示し、野宿者観を「不潔視」「恐れ視」「怠惰視」の次元にて調査・分析・考察する。

ところで、本稿では「野宿者」という概念ではなく、「浮浪者」という概念を用いる。青木が「浮浪者」という概念を用いず、「野宿者」という概念を用いていることは大いに理解しえる。氏も述べているとおり、「浮浪者」という用語には既にラベリングないしは一定の先入観が含まれている。しかし、「野宿者」という用語は一般の人びとにとってはなじみの薄い、それゆえイメージとして捕えずらい用語である。したがって、一般の人びとを対象とした調査にあっては、問題のある用語ではあるが、「浮浪者」という用語の方がベターである。しかも「問題のある用語」の、その「問題」を析出しようとするのであるからして、なおさらである。

［2］ 調査の目的

青木論文の修正より導かれた本調査の基本的思考を図式的に整理してみると、次のようになる。

<社　会>		<価　値>		<浮浪者観>
清潔社会	—	清潔価値	→	不潔視
勤労社会	—	勤労価値	→	怠惰視
秩序社会	—	秩序価値	→	恐れ視

そこで調査の目的に移る。

第1に、浮浪者に対する3つの「視」が人びとのあいだにどのように分布しているのか。言い換えれば、3つの「視」のなかでどれが一番強く浮浪者観を規定しているのか。このことを調べる。

第2に、勤労価値に基づいて浮浪者を怠惰視するのであれば、勤労価値を強く内面化している者ほど浮浪者をより怠惰視するものと思われる。よってこのことを調べる。また同様に、清潔価値・不潔視と秩序価値・恐れ視についても調べる。

［3］ 調査の概要

(1) 調査対象、方法、期間、有効票数

a　調査対象

本来ならば、一般の人びとを対象にして調査すべきではあるが、本調査は大学生を対象とした。

対象校は3大学である。A大学は東京都内にある4年制の総合大学で、対象とした学生は社会学科の1年生から4年生である。B大学も東京都内にある4年制の総合大学で、対象としたのは法律学科の1年生から4年生である。C大学は神奈川県下にある女子短期大学で、家政科の1年生と2年生である。

b　調査方法

質問紙法による集合調査法を用いた。

c　調査期間

1987年6月30日から7月9日まで。

d　有効票数

A大学：配票数201、有効票数200（男130、女70）。B大学：配票数193、有効票数189（男152女37）。C大学：配票数124、有効票数124（女124）。計：配票数518、有効票数513（男282女231）、有効票率99.0％。

(2) 対象者の属性

対象者の属性としては、表1－1のみを掲げておく。女子短大を調査対象校としたため、女子に1、2年生が多くなってしまったこと、また4年生が少なかったことに問題が残ろう。しかし、学年間には分析上あまり差異はみられなかった。

なお、以後の分析では、学年別分析および大学別分析は行わない。ただし、男子学生と女子学生では著しい差異がみられるため、男女別の分析は行う。

表1－1　対象者の属性（性と学年）（%）

	1年	2年	3年	4年	
男	25.5	31.2	32.3	11.0	N=282
女	55.0	29.9	10.0	5.2	N=231
全	38.8	30.6	22.0	8.4	N=513

第2章　大学生自身

大学生の浮浪者観を分析するに先立ち、ここではその予備段階として、大学生自身について分析してみる。すなわち、大学生自身の清潔度、勤労観、恐れ度をみてみようというわけである。

［1］大学生の清潔度

かつての大学生は決して「清潔」というイメージではなかった。戦前のバンカラスタイルにしても、学園粉争華やかなりし頃のジーンズ姿にしても、汗臭い、泥臭いイメージが強かった。

「男の下宿にウジがわく」と言われた位に不潔であったし、またそういった不潔を誇りとしていた風さえあった。しかしいつの間にか大学生は男女ともオシャレになり、清潔になりだした。そして不潔を誇りとするようなバンカラ気取りもなくなってしまった。

表2－1－A～Cは「入浴」「洗髪」「下着（パンツ・パンティー）の取り替え」について調べた結果である。

これをみると、男も女も大半の者が、毎日風呂に入り、毎日髪を洗い、毎日下着を取り替えていることが分かる。男子学生にあっては、ほぼ100パーセントの人が3日に一度は入浴し、洗髪し、下着を取り替えており、女子学生にあっては、ほぼ100パーセントの人が2日に一度は入浴し、洗髪し、毎日下着を取り替えているのである。

いかに現在の学生が清潔であるかがお分かりいただけよう。いや大学生だけでなく、また若い人たちだけでなく、老若男女多少の差異はあったとしても、現在の日本人はかなり清潔に敏感になっているものと思われる。

表2－1－A　入浴　(%)

	毎日	2日に1度	3日に1度	
男	70.6	26.2	3.2	N=279
女	90.4	9.1	0.4	N=230
全	79.6	18.5	2.0	N=509

表2－1－B　洗髪　(%)

	毎日	2日に1度	3日に1度	4～5日に1度	週に1度	月に2～3度
男	58.9	34.6	5.0	0.7	0.4	0.4
女	78.8	20.3	0.4	0.4	0.0	0.0
全	67.9	28.2	2.9	0.6	0.2	0.2

男：N＝280，女：N＝231，全：N＝511

表2－1－C　下着の取り替え　(%)

	毎日	2日に1回	3日に1回	
男	85.4	13.2	1.4	N=281
女	98.7	1.3	0.0	N=229
全	91.4	7.8	0.8	N=510

こうした清潔社会そして清潔価値を大事にする人びとのなかにあっては、ほんの少しの不潔でも目立ち、そして「不潔」という烙印を押される危険性がある。ほぼ100パーセントの人が3日に一度は風呂に入り、下着を取り替えていれば、4日に一度ないし5日に一度の人は「不潔」になってしまうのである。

しかも近年、「不潔」という観念が、ただ単に「清潔－不潔」という次元から、その人の人格ないし存在価値までも評価・規定する観念にと変化しつつあるように見受けられる。少なくとも、不潔者は不潔ということだけで嫌われる世の中になってしまっているのである。

［2］ 大学生の勤労観

最近の大学生は無気力、無努力でめんどくさいことが大嫌い、などとよく言われる。しかしそんな彼らも社会人になり数年たつと、「企業戦士」としてガンバリズムの渦のなかでけっこう生きているようである。そんな大学生の勤労観をいくつかの視点からみてみたのが、表2－2－A～Dである。

表2－2－A　2つの社会について　(%)

	男子	女子	全体
本人の実力次第、努力次第でいくらでも良い生活ができる社会	70.9	52.8	62.8
お互いに競争することなく皆が同じ低度の生活を保証されている社会	29.1	47.2	37.2
計	100.0 282	100.0 231	100.0 513

表2－2－B　人生の生きがいについて　(%)

	男子	女子	全体
人生の生きがいは仕事に打ち込むことにある	9.6	4.8	7.4
人生の生きがいは生活を楽しむことにある	90.4	95.2	92.6
計	100.0 282	100.0 231	100.0 513

表2－2－C　働くことについて　(%)

	男子	女子	全体
健康なのに働かないでいる人は、人間として問題がある	63.5	63.6	63.5
働かなくても生きていけるならば、なにも働くことはない	36.5	36.4	36.5
計	100.0 282	100.0 231	100.0 513

表2－2－D　貧乏人について　(%)

	男子	女子	全体
貧乏人は努力を怠ったなまけものなのだ	53.1	63.3	57.7
貧乏人は正直で損をした善人なのだ	46.9	35.7	42.3
計	100.0 275	100.0 226	100.0 501

一見のんきでいいかげんにみえる大学生ではあるが、勤労観に関してはかなりシビアな見方をしていることが分かる。確かに9割以上の学生が、「人生の生きがいは生活を楽しむことにある」と答えており、この点に関しては仕事第一主義ではないといえるが、その反面、半数以上の男女が実力主義社会を望み、働かないでいる人を問題視し、貧乏人を怠けの結果と答えているのである。要するに、怠けず、働き、実力主義の社会で勝者となり、生活を楽しむ、という人生観をもった大学生がかなりの割合で存在しているということがうかがえるのである。

一見いいかげんにみえる大学生であっても、また仕事よりも生活のエンジョイを求める大学生であっても、勤労価値はかなり根強く浸透していることが分かる。ましてや中高年の社会人にあっては、大学生以上であることは言うまでもなかろう。

［3］ 大学生の恐れ度

人間誰しも自己の生活秩序を乱す者（もしくは乱すと思われる者）には警戒心を抱くであろう。

また安全な存在と危険な存在とを日常生活のなかで暗黙のうちに認識し、区別していると思える。自己の生活秩序は「ウチ」という概念で置き換えることが可能であろう。とすれば、「ヨソモノ」の接近は秩序破壊の危険信号となる。そこでは警戒と恐れが台頭する。しかもそのヨソモノが日常生活において理解可能でない場合、つまり「得体の知れない存在」である場合、警戒と恐れは増進されることであろう。一般の人びとの浮浪者に対する意識にはこのような心理的メカニズムが働いているように思えるのである。

そこで大学生のヨソモノに対する警戒心と恐れについて調査してみた。その結果が表2－3である。

この表より、見ず知らずの男に対しては、相手がどのような存在であろうと、一応は警戒するということが分かる。しかし、それが「恐れ」にまでなるか否かは、後から着いてくる男の様相（身なりや態度）によって違ってくる。「サラリーマン風の男」（理解可能な存在、秩序社会の維持者）では警戒が恐れまでには高まらないが、「浮浪者風の男」（得体の知れぬ存在、秩序社会のアウト

サイダー）では恐れが高まり、さらに「ヤクザ風の男」（危険性のある存在、秩序社会の破壊者）で最も恐れの意識は高くなるのである。ただし男子学生と女子学生ではかなりの違いを示している。

表２－３　３様の男への警戒心と恐れ

「薄暗い夜道、あなたが一人で歩いていると、あとから男がついてきます。そのときあなたは……」　(%)

		A	B	C	
サラリーマン風の男	男	6.8	69.4	23.8	N=281
	女	35.5	60.2	4.3	N=231
	全	19.7	65.2	15.0	N=512
浮浪者風の男	男	22.7	69.1	8.2	N=282
	女	82.3	15.6	2.2	N=231
	全	49.5	45.0	5.5	N=513
ヤクザ風の男	男	66.7	28.4	5.0	N=282
	女	85.3	13.0	1.7	N=231
	全	75.0	21.4	3.5	N=513

A…こわいと思う。
B…こわいと思わないが、警戒する。
C…こわいと思わないし、警戒もしない。

女子の恐れ意識はかなり強く、「浮浪者風の男」は「ヤクザ風の男」と同程度に恐れ視されているといえる。

［４］　第２章のまとめ

第２章をまとめてみる。

①　大学生の清潔度はきわめて高い。特に女子大生の場合は顕著である。やはり現代社会は「清潔社会」であり、「清潔価値」が強く生活のなかに浸透していることがうかがえる。

②　モラトリアム期にいる大学生であっても、「勤労価値」はかなり浸透し、支持されている。実力主義社会の肯定、働かない者への問題視、貧乏人は怠け者という見方に、「勤労社会」での「勤労価値」の大学生への浸透性がうかがえる。

③　見ず知らずの者に対する警戒心は相手の様相に関係なく状況に応じ生じる。しかし相手の様相により「恐れ」は変化する。「秩序社会」から遠い存在であればあるほど恐れられる存在となる。

第３章　大学生の浮浪者観

この章では、大学生の浮浪者観について、その全体像を分析する。「調査の目的」に則していえば、第１の目的、つまり、大学生の浮浪者に対する<不潔視><怠惰視><恐れ視>がどのように分布しているのか、どれが最も強いのか、ということを全体と男女別にみていこうというわけである。

［１］浮浪者との接触

まず初めに、浮浪者観を分析するに先立ち、大学生の浮浪者との接触について分析する。

ほとんど100パーセントの学生が、浮浪者を見かけたことがあると答えている。しかし浮浪者と話をしたことのある大学生は、男子で 16.9％、女子では5.7％しかいない。したがって、見かけはするが話したことはない、というのが一般の大学生である。

表３－１　浮浪者に話しかけられた場合　(%)

	男子	女子	全体
親身になって話しを聞く	3.2	1.3	2.4
適当に話しを聞く	40.6	17.9	30.4
一言断ってその場を去る	19.2	27.5	22.9
黙ってその場を去る	33.8	51.1	41.6
ばかにしてその場を去る	1.4	0.0	0.8
その他	1.8	2.2	2.0
計	100.0 281	100.0 229	100.0 510

表３－２　ベンチに浮浪者と同席した場合　(%)

	男子	女子	全体
そのまま座っている	36.1	13.1	25.7
ベンチから去る	61.8	85.6	72.5
浮浪者を追い返す	1.1	0.0	0.6
その他	1.1	1.3	1.2
計	100.0 280	100.0 229	100.0 509

それでは、もし浮浪者に話しかけられたとしたら、どうするであろうか。表３－１はその答えである。男子では半数以上が、女子では８割近くの人が話しかけられても立ち去ると答えている。親

身になって聞く者はほんのわずかである。

表3－2はベンチに浮浪者と同席した場合どうするかという問の答えである。ここでも6割以上の男子、そして86％の女子が立ち去ると答えている。

これらのことから、大学生が全般的に浮浪者を避けていることが分かる。特に女子の場合その傾向が著しい。「避ける」ということそれ自体が既に大学生の浮浪者観を語っているが、このことについてさらに深く分析していくことにする。

［2］浮浪者観

表3－3は「怖い人」「怠け者」「不潔な人」というイメージのなかで、浮浪者に対してどのイメージが一番強いか、強い順に順位を書いてもらった、その結果である。

表にみるとおり、「不潔な人」というイメージが圧倒的に強いことが分かる。つまり、浮浪者に対する規定の第一、もしくは最も強い浮浪者観は、

表3－3　浮浪者観第1位　(%)

	男子	女子	全体
不潔な人	78.9	80.5	79.6
なまけ者	18.9	13.9	16.7
恐い人	2.5	5.7	3.9
計	100.0 280	100.0 231	100.0 511

「不潔な人」ということになる。

青木論文ではこれら3つを野宿者へのラベリングとして同列に扱かっているが、実際には浮浪者はまず第1に「不潔な人」と規定されるのである。そして第2に「怠け者」として規定され、第3に「怖い人」と規定されるわけである。このことは表3－3からも分かるし、またイメージの第2位に「怠け者」を挙げた学生が58.8％（男66.1％、女50.0％）と圧倒的に多く、イメージの第3位に「怖い人」を挙げた学生が73.8％（男83.1％、女62.6％）と圧倒的に多かったことからも分かる。

したがって、浮浪者観の第1構成要素は「不潔視」、第2構成要素は「怠惰視」、第3構成要素は「恐れ視」ということができる。

［3］不潔視

そこで「不潔視」について分析していくことにする。

表3－4は浮浪者を不潔とみているか否かを調べたものである。「とても不潔」と「不潔」を合わせると、男子学生では90％、女子学生では96.5％にもなる。これに「少し不潔」を加えれば、ほぼ100％である。大学生がいかに浮浪者を不潔視しているかがよく分かる。

このような浮浪者に対する不潔視は、浮浪者の入浴、洗髪、歯磨き、下着の取り替えについての大学生の意識からもよくうかがえる。大学生が想定する浮浪者の入浴は「毎日」「2日に1度」「3日に1度」「4～5日に1度」「週に1度」を合計して、男子で6.1％、女子で5.3％である。「月に2～3度」「月に1度」「2～3か月に1度」を合計して、男子で43.0％、女子で41.2％となる。そして「半年に1度」「1年に1度」「2～3年に1度」「5～6年に1度」「10年に1度」「全くない」を合計すると、男子49.8％、女子で48.2％となる。

同様に洗髪では、「毎日」から「週に1度」が6.1％と3.9％。「月に2～3度」から「2～3か月に1度」が41.6％と39.5％。「半月に1度」から「全くない」が52.0％と51.8％。

また歯磨きでは、「毎食後」から「週に1～2回」が20.1％と27.0％。「月に2～3回」から

表3－4　浮浪者への不潔視　(%)

	男子	女子	全体
とても不潔	42.0	54.5	47.7
不潔	48.0	42.0	45.3
少し不潔	9.3	3.5	6.6
不潔ではない	0.7	0.0	0.4
計	100.0 281	100.0 231	100.0 512

「2～3か月に1回」が20.9％と18.3％。「半年に1回」から「全くない」が57.9％と51.1％。

そして下着の取り替えでは、「毎日」から「週に1回」が13.0％と14.4％。「月に2～3回」から「2～3か月に1回」が38.3％と41.0％。「半年に1回」から「全くない」が47.7％と40.2％で

ある。

以上のデータは、先に記した大学生の入浴、洗髪、下着の取り替えに比べてみると、あまりにも隔たりが大きい。この大きな隔たりこそ大学生が浮浪者を不潔視する1つの大きな原因であると思われるし、また逆に、大学生の浮浪者に対する不潔視の結果を示しているとも思われるのである。とにかく、上記のデータは、大学生がいかに浮浪者を不潔視しているかをよく物語っていよう。

この不潔視が、先に記した浮浪者を避けるという大学生の態度に結びついていることが、表3－5より分かる。

「あなたがもし浮浪者とからだの一部が触れ合ったとします。そのときあなたは……」という質問をしてみた。その答えとして、「いやな気持ちになる」と答えた者が男子で79.8％、女子で93.0％いた。この人たちにサブ・クエスションとして、「なぜいやな気持になるのですか」と質問してみた。その結果が表3－5である。

表3－5　不快理由　(%)

	男子	女子	全体
汚いから	78.2	61.7	70.2
こわいから	3.5	20.1	11.5
知らない人だから	3.1	6.5	4.7
人間的に問題があるから	3.5	4.7	4.1
病気やバイ菌や虫など移るかもしれないから	9.6	6.1	7.9
その他	2.2	0.9	1.6
計	100.0 229	100.0 214	100.0 443

表より、「汚いから」という答えが圧倒的に多いことが分かる。しかも「病気やバイ菌や虫など移るかもしれないから」という回答も「不潔」という次元でみれば「汚いから」と同一の内容として分類しえるので、これを合わせてみると、男子では87.8％、女子では67.8％となる。これより、浮浪者への不潔視ゆえに浮浪者を避けるという、大学生の意識－行為の関連が見い出されるのである。

［4］　怠惰視

浮浪者への怠惰視は浮浪者観を構成する第2の要素であった。そこでこの「怠惰視」がどれほど大学生に浸透しているのかを調べてみた。表3－6がその結果である。

「とても怠け者」と「怠け者」を合わせると、男子では59.0％、女子では71.8％となる。これは不潔視よりはいくらか低い数値ではあるが、それでもかなり高いといえよう。また、不潔視と同様、ここでも男子に比べ女子のほうが数値が高い。しかし先にみたように、この怠惰視は浮浪者との接触を避ける要因としては弱い。したがって、怠惰視は浮浪者観を構成する第2の要素であり、大半の大学生が浮浪者を怠惰視してはいるが、浮浪者を避ける要因にはなっていない、といえよう。

表3－6　浮浪者への怠惰視　(%)

	男子	女子	全体
とても怠け者	18.1	22.9	20.3
怠け者	40.9	48.9	44.5
少し怠け者	22.1	18.6	20.5
怠け者ではない	18.9	9.5	14.6
計	100.0 281	100.0 231	100.0 512

［5］　恐れ視

恐れ視は浮浪者観を構成する第3の要素である。表3－7は大学生が浮浪者を「怖い人」とみているか否かを調べた結果である。表にみるとおり、男子と女子とでは大きな違いを示している。男子の場合、「とても怖い」と「怖い」を合計しても7.1％であり、浮浪者に対してさほど恐れを抱いていないことが分かる。しかし女子の場合は、42.4％の者が「とても怖い」もしくは「怖い」と答えている。

したがって、恐れ視は浮浪者観を構成する第3の要素であり、大学生の恐れ視は不潔視、怠惰視に比べかなり低いが、しかし女子にあっては浮浪者への恐れ視は強く、しかも浮浪者を避ける第2の要因になっている、といえよう。

［6］　浮浪キャリア

以上、不潔視、怠惰視、恐れ視についてみてき

表3－7　浮浪者への恐れ視　(%)

	男子	女子	全体
とても怖い	2.1	8.2	4.9
怖い	5.0	34.2	18.2
少し怖い	37.9	40.7	39.2
怖くない	55.0	16.9	37.8
計	100.0 282	100.0 231	100.0 513

たわけであるが、この3つの浮浪者観構成要素に関連する要件として、浮浪者キャリアについて記す。

大学生が浮浪者に対して浮浪生活を何年続けているかと想定することは、不潔視にも怠惰視にもそして恐れ視にも関連する。なぜならば、浮浪生活を長く続けていると想えば、それだけ不潔と視るようになるし、またそれだけ怠け者と視るようになるであろうし、漂流性が長ければ長いほど、「得体の知れぬ存在」「社会秩序からはみ出した存在」と視るようになるであろうと、考えられるからである。

そこで50歳代の男の浮浪者は浮浪生活を何年くらいしていると思うか、と尋ねてみた。その結果、男子では、1年から5年までが17.8%、6年から10年までが33.0%、11年から15年までが13.0%、16年から20年までが27.9%、21年以上が8.3%であった。女子では、1年から5年までが30.0%、6年から10年までが28.3%、11年から15年までが13.0%、16年から20年までが19.6%、21年以上が9.1%であった。つまり、男子では8割の者が6年以上と、そして半数の者が11年以上と浮浪者キャリアを想定しており、女子では7割の者が6年以上と、そして4割の者が11年以上と浮浪者キャリアを想定しているわけである。なお、男女の合計平均は13.25年であった。

女子の方が男子よりいくらか年数が短いが、それでも男女ともかなり長い期間、50歳代の男の浮浪者は浮浪生活をし続けていると想定していることが分かる。

［7］　実際と認識とのずれ

こうした浮浪キャリアの想定ははたして妥当なものなのであろうか。

実際のデータはないが、私の知りえた範囲では（横浜にて冬の間毎週木曜日に、グループを組んでスープや下着、毛布などをもって、野宿者の間を廻ったことがある。）、数週間前もしくは数日前までは働いていた、野宿はしていなかった、という野宿者（浮浪者）の方が多かった。しかし大多数の大学生はそのようなことを知る由もない。彼らは、浮浪者は何年も何十年も浮浪者をしていると思っているのである。こうした現実とは食い違う認識こそが、「浮浪者観」の実態であり、浮浪者へのラベリングの実態なのである。

この実際と認識とのずれは、浮浪者の入浴、洗髪、歯磨き、そして下着の取り替えについても言えることである。

野宿者（浮浪者）は、一般の人たちが思っている以上にひんぱんに風呂に入り、もしくはシャワーを浴び、髪を洗い、歯を磨き、そして下着を取り替えているのである。ある野宿者は、毎日歯を磨き、3日に1度は風呂に入るかシャワーを浴びるか、それができなければ濡れたタオルで体を拭き、その度に下着を取り替える、と答えている。もちろんこれは1つの事例であって、他の人もそうだというわけではない。しかし大学生の浮浪者に対する認識はやはりかなりずれているといわざるをえない。この「ずれ」の独り歩きこそが危険なのである。

［8］　浮浪者への対策

大学生は浮浪者の野宿をどうみているのだろうか。表3－8は、浮浪者の公園や地下道などでの野宿に対して、「迷惑である」「迷惑ではない」の二者択一で答えてもらった結果と、「目ざわりである」「目ざわりではない」の二者択一で答えてもらった結果を表わしたものである。

表にみるとおり、大半の大学生が浮浪者の野宿を、迷惑であり、目障りであると思っている。特に、男子に比べ女子はその比率が高い。女子の場合男子に比べ、不潔視も怠惰視も恐れ視も比率が高かったので、迷惑・目障りと思う傾向も強いのかもしれない。

さてこのような、浮浪者の野宿を迷惑・目障りと、うとんじる意識は、浮浪者の野宿への対策についての意識ないしは期待につながるであろう。

表３－９は、浮浪者の野宿に対する警察や行政の対策への要望を尋ねた結果であり、また表３－10は「……のため、立ち退くように指導してほしい」と答えた者に対して、サブ・クエスションとして、具体的対策を「収容」と「野宿場所の指定」「その他」で答えてもらった結果である。

表３－８　浮浪者の野宿について　(%)

	男子	女子	全体
迷惑である	58.4	71.0	64.1
迷惑ではない	41.6	29.0	35.9
目ざわりである	73.7	83.1	77.9
目ざわりではない	26.3	16.9	22.1
計	100.0 281	100.0 231	100.0 512

さて、表３－９にみるように、「公衆衛生と環境美化のため」「治安のため」と理由は異なっていても、とにかく「立ち退くように指導してほしい」と答えた学生は、男子で73.3%、女子で88.3%である。男子では４人に３人が、女子では10人に９人までが、浮浪者の排除を望んでいるわけである。なお、女子に「治安のため」と答えた者が多いのは、女子の浮浪者に対する恐れ視の強さが導いたものと思われる。

こうした立ち退きを求める人達の具体策はというと、男女ともに約半数の人が「収容」を望んでいる。したがって、８割の半数、つまり４割の大学生が、野宿をする浮浪者の強制収容を望んでいることになる。しかも「その他」には「福祉的援助を」といった回答も多くあったが、それらとともに「刑務所に入れろ」「精神病院に入れろ」という回答もかなりあったのである。

以上のことより、大学生の野宿する浮浪者に対する排除性はかなり高いと、結論づけてよさそうである。

［９］　第３章のまとめ

この章の終りとして、第３章をまとめてみる。

①　大学生は浮浪者を避ける傾向が強い。その最大の要因は不潔視である。

②　浮浪者観の第１構成要素は不潔視である。第２構成要素は怠惰視、第３構成要素は恐れ視である。

③　大学生の浮浪者に対する不潔視はきわめて広く、そして深く浸透している。

④　大学生の浮浪者に対する怠惰性は、不潔視に次いで広く浸透している。ただし、怠惰視は浮浪者を避ける要因としてはそれほどでもない。

⑤　大学生の浮浪者に対する恐れ視はさほど強くない。ただし、女子の場合、恐れ視は強い。また女子の場合、恐れ視は浮浪者を避ける第２の要因になっている。

⑥　男子に比べ女子は、不潔視も怠惰視も恐れ視も強い。

⑦　大学生の浮浪者に対する認識は浮浪者の実際とずれている。このずれが大学生の不潔視、怠惰視、恐れ視を強く規定しているように思える。

⑧　大学生は浮浪者の野宿を迷惑・目障りとみており、立ち退きを望んでいる。また半数近くの者が浮浪者の収容を望んでいる。これらのことは、男子よりもいくらか女子に強くみられる。

表３－９　浮浪者の野宿に対する警察や行政への要望　(%)

	男子	女子	全体
公衆衛生と環境美化のため、立ち退くように指導してほしい	44.5	47.0	45.6
治安のため、立ち退くように指導してほしい	28.8	41.3	34.4
その他	26.7	11.7	20.0
計	100.0 281	100.0 230	100.0 511

表３－10　具体的対策　(%)

	男子	女子	全体
浮浪者をどこか適当なところへ収容する	50.3	55.7	52.9
野宿してもよい特定の場所を設定し、そこ以外では野宿させない	36.2	32.8	34.5
その他	13.6	11.5	12.5
計	100.0 199	100.0 192	100.0 391

第４章　勤労価値からの分析

「勤労社会――勤労価値――→怠惰視」という図式に組み込まれている仮説を検証するのがこの章の目的である。

勤労社会では、まじめに働くことは良いことであり、尊いことであり、怠けることは悪いこと、軽蔑すべきことである。「勤勉－怠惰」は人を判断し、評価する大きな尺度となる。そしてこの尺度より浮浪者は怠惰視され、非難される。

したがってこれより、勤労価値を強く内面化した者ほど浮浪者を怠惰視する、という第１の仮説が導き出される。そしてこの第１の仮説より、より怠惰視するがゆえに、浮浪者に対してより軽蔑的・批判的である、という第２の仮説が導き出されるし、また浮浪者への排除もより強い、という第３の仮説も導き出される。

以下、この章ではこれら３つの仮説の検証を行う。

［１］　勤労観による３分類

仮説の検証に先立ち、大学生の勤労観の調査より、大学生を「勤勉層」「中間層」「余裕層」に３分類した。分類方法は、第２章の表２－２－Ａ～Ｄで各表の上部の回答項目を１点とし、下部の回答項目を２点とし、その合計が４点と５点の者を「勤勉層」、６点の者を「中間層」、７点と８点の者を「余裕層」とした。そして大学生の勤労観による差異を３層の差異として、仮説の検証を試みた。

３層の比率は、「勤勉層」が男子32.７％、女子24.２％、「中間層」が男子34.２％、女子42.３％、「余裕層」が男子33.１％、女子33.５％であった。男子はほとんど３層に３分割されているが、女子の場合はやや「勤勉層」が少なく「中間層」が多くなっている。しかし男女別にも分析することであるし、これくらいの偏りは分析に支障ないものと思われる。

［２］　勤労価値と怠惰視

「不潔な人」「怠け者」「怖い人」という浮浪者のイメージのうち、「怠け者」というイメージの順位を掲げたものが表４－１である。

前章で論じたように、浮浪者に対してのイメージでは「不潔な人」というイメージが圧倒的多数であった。したがって「怠け者」というイメージを第１位にした者は少ない。しかし表にみるように、「怠け者」を第１位とする者の比率は、「勤勉層」より「中間層」の方が、「中間層」より「余裕層」の方が低い。そして「怠け者」を第３位とする者の比率はその逆になっている。これを男女別にみると、男子の場合は第３位の比率では差異はみられないが、第１位の比率に差異がみられる。また女子では逆に第１位の比率では差異はみられないが、第３位の比率に差異がみられる。しかしいずれにせよ、男女とも「余裕層」の学生のほうが浮浪者を怠惰視する傾向は低いであろうということがうかがえる。

表４－２は、浮浪者をどれほど怠け者とみているか否かを調べたものである。この表では、「男子」「女子」「全体」とも明確に、「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者をより強く怠惰視する傾向のあることが分かる。

よってこれら２つの表より、勤労価値をより強く持っている大学生ほど浮浪者をより強く怠惰視する、という第１の仮説が成り立つのである。

［３］　浮浪者との接触と浮浪キャリア

「浮浪者を見かけたことがあるか」という質問の答え、および「浮浪者と話したことがあるか」という質問の答えには、「勤勉層」「中間層」「余裕層」間に差異はみられなかった。しかし「もし浮浪者に話しかけられたら、あなたは……」という質問の答えには差異が生じた。表４－３はこのことを表わしたものである。

「親身になって話しを聞く」と「適当に話しを聞く」とをセットにして「接触」とし、「黙ってその場を去る」「ばかにしてその場を去る」をセットにして「軽蔑的回避」とし、「一言断わってその場を去る」を「回避」として表にしたものである。

この表より、「男子」「女子」「全体」ともに「接触」は「余裕層」の方が「勤勉層」よりも比率が高く、逆に「軽蔑的回避」では「勤勉層」の方が「余裕層」より比率が高いことが分かる。つまり、「勤勉層」はより浮浪者を避けるということ、言い換えれば、勤労価値を強く内面化してい

る大学生ほど浮浪者を避けるということが分かる　のである。

表4－1　浮浪者の「怠け者」イメージ順位　(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
1位	25.6	18.3	13.3	14.5	13.7	13.2	21.4	16.4	13.3
2位	60.0	63.4	73.3	58.2	47.4	46.1	59.3	55.0	60.8
3位	14.4	18.3	13.3	27.3	38.9	40.8	19.3	28.6	25.9
計	100.0 90	100.0 93	100.0 90	100.0 55	100.0 95	100.0 76	100.0 145	100.0 189	100.0 166

表4－2　浮浪者の「怠け者」イメージ　(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
とてもなまけ者	27.8	14.0	13.2	30.9	24.0	15.8	29.0	18.9	14.4
なまけ者	47.8	40.9	33.0	58.2	46.9	43.4	51.7	44.2	37.7
少しなまけ者	17.8	23.7	25.3	5.5	24.0	22.4	13.1	23.7	24.0
なまけ者でない	6.7	21.5	28.6	5.5	5.2	18.4	6.2	13.2	24.0
計	100.0 90	100.0 93	100.0 91	100.0 55	100.0 96	100.0 76	100.0 145	100.0 190	100.0 167

表4－3　浮浪者に話しかけられた場合　(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
接触	36.2	43.4	52.3	15.1	15.1	28.4	29.6	29.1	41.4
回避	18.0	21.7	19.3	28.3	26.9	31.1	21.8	24.2	24.7
軽蔑的回避	43.8	34.8	28.4	56.6	58.1	40.5	48.6	46.7	33.9
計	100.0 89	100.0 92	100.0 88	100.0 53	100.0 93	100.0 74	100.0 142	100.0 186	100.0 162

同様のことが表4－4からもうかがえる。

この表は、「もし同じベンチに浮浪者が座ったら、あなたは……」という問の答えである。この表からも、「男子」「女子」「全体」ともに、「勤勉層」は浮浪者との接触を避ける傾向が「余裕層」よりも高いことが分かる。

したがって、勤労価値を強く内面化している大学生は、そうでない大学生より浮浪者をより避ける傾向にあるということ、そしてさらに、その回避には多分に軽蔑・嫌悪の意識が潜んでいるということが分かるのである。

表4－5は浮浪者のキャリア、つまり浮浪者の浮浪生活年数の想定を尋ねた結果である。

先に浮浪者観と浮浪キャリアとは関連性があること、および実際の浮浪キャリアと大学生が想定した浮浪キャリアとには、はなはだしいずれがあることを述べたが、この表より、それらのこととともに、「男子」「女子」「全体」とも、「勤勉層」の方が「余裕層」よりも浮浪キャリアを長く想定していることが分かる。これより、「浮浪生活期間が長い」から「怠惰だ」という意識の関連性とともに、逆に、「勤勉は良いことだ」という「勤労価値」に基づいて浮浪者を「怠惰視」する傾向が強いゆえに、「浮浪生活期間は長い」と

いう想定が生れてくる、という意識の関連性も読　　み取れるのである。

表4－4　ベンチに浮浪者と同席した場合　(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
そのまま座っている	26.7	37.4	46.1	10.9	12.6	16.4	20.7	25.1	32.7
ベンチから去る	72.2	61.5	52.8	89.1	87.4	83.6	78.6	74.3	66.7
追い返す	1.1	1.1	1.1	0.0	0.0	0.0	0.7	0.5	0.6
計	100.0 90	100.0 91	100.0 89	100.0 55	100.0 95	100.0 73	100.0 145	100.0 187	100.0 162

表4－5　浮浪者の浮浪生活年数の想定　(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
5年以内	12.4	15.4	25.8	21.8	34.4	31.6	16.0	25.5	28.5
6年から19年	46.1	48.4	44.9	40.0	39.6	43.4	43.8	43.6	44.2
20年以上	41.6	36.3	29.2	38.2	26.0	25.0	40.3	30.6	27.3
計	100.0 89	100.0 91	100.0 89	100.0 55	100.0 96	100.0 76	100.0 144	100.0 188	100.0 165

［4］　勤労観と排除、対策

表4－6は、浮浪者の公園や地下道での野宿について、「迷惑である」「迷惑ではない」の二者択一と、「目ざわりである」「目ざわりではない」の二者択一で答えてもらった結果を「勤勉層」「中間層」「余裕層」の3層で表示したものである。

表にみるとおり、「男子」「女子」「全体」ともに、「迷惑である」という回答も「目ざわりである」という回答も、「勤勉層」の方が「余裕層」に比べ比率が高い。つまり、「勤勉層」は浮浪者をより迷惑であり、目障りであると感じているということが分かるのである。

こうした浮浪者に対する嫌悪感・反感は浮浪者への排除に結びつくものと思われる。

表4－6　浮浪者の野宿について　(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
迷惑である	70.0	59.6	46.7	85.5	71.9	60.5	75.9	66.0	53.0
迷惑ではない	30.0	40.4	53.3	14.5	28.1	39.5	24.1	34.0	47.0
目ざわりである	82.2	77.7	63.3	90.9	84.4	76.3	85.5	81.2	69.3
目ざわりではない	17.8	22.3	36.7	9.1	15.6	23.7	14.5	18.8	30.7
計	100.0 90	100.0 94	100.0 90	100.0 55	100.0 96	100.0 76	100.0 145	100.0 191	100.0 166

表4－7は、公園や地下道などで野宿している浮浪者に対しての、警察や行政に望む対策を尋ねた結果である。表の「立ち退くよう指導してほしい」というのは、「公衆衛生と環境美化のため、

立ち退くよう……」と「治安のため、立ち退くよう……」とを合わせたものである。

この表より、「男子」「女子」「全体」ともに「余裕層」は「勤勉層」や「中間層」に比べ「立ち退くよう指導してほしい」という排除性が低いということが、逆に言えば、「そのまま居させてよい。立ち退かせる必要はない」という許容性の高いことが分かる。

以上の２つの表より、「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者に対する嫌悪感・反感が強く、また排除性も高い、ということが言えるのである。

［５］　第４章のまとめ

この章の結論をまとめてみると、次のようになる。

①　「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者をより強く怠惰視する傾向がある。つまり、「勤労価値」をより強く内面化している大学生ほど浮浪者をより強く怠惰視する、ということである。これにて「勤労社会―勤労価値→怠惰視」という図式が正しいことが検証された、と言える。

表４－７　浮浪者の野宿に対する警察や行政への要望

(%)

	男子			女子			全体		
	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕	勤勉	中間	余裕
立ち退くよう指導してほしい	80.0	77.7	64.8	94.5	90.6	80.3	85.5	84.3	71.9
立ち退かせる必要はないそのまま居させてよい	20.0	22.3	35.2	5.5	9.4	19.7	14.5	15.7	28.1
計	100.0 90	100.0 94	100.0 91	100.0 55	100.0 96	100.0 76	100.0 145	100.0 191	100.0 167

②　「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者との接触を避ける傾向が強い。しかもその傾向は「軽蔑的回避」もしくは「嫌悪的回避」とでも呼べるものである。したがってこれより、「勤労社会―勤労価値→怠惰視→軽蔑的・嫌悪的回避」という図式が成り立つ。

③　「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者の浮浪生活期間を長く想定している。つまり、実際の浮浪生活期間よりもより長く想定しているわけである。したがってこれより、「勤労社会―勤労価値→怠惰視→浮浪者に対しての認識のずれ」という図式が成り立つ。

④　「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者への嫌悪感・反感が強い。さらに「勤勉層」は「余裕層」よりも浮浪者に対する排除性が強い。したがってこれより、「勤労社会―勤労価値→怠惰視→浮浪者に対する嫌悪・反感と排除」という図式が成り立つ。

⑤　以上のことには、ほとんど男女差はみられない。なお、②③④の図式の最後の意識形態は相互に深く関連しているものと思われる。

第５章　その他の分析結果

［１］不潔視分析と恐れ視分析の失敗

調査目的の最後の２つ、すなわち「清潔社会―清潔価値→不潔視」の分析と「秩序社会―秩序価値→恐れ視」の分析は分析不能に陥ってしまった。

前者の分析では、「清潔価値をより強く内面化している大学生ほど、浮浪者をより強く不潔視する」という仮説の検証を求めたのであったが、既に記したように、今の大学生があまりにも皆清潔で、「清潔層」「中間層」「不潔層」に分類することができなかったため、また無理に分類したものの、結果としてほとんど何も出てこなかったため、分析を断念することにした。

後者の分析では、「秩序価値をより強く内面化している大学生ほど、浮浪者をより強く恐れ視する」という仮説の検証を求めたのであったが、秩序価値の内面化のワーディングに失敗してしまい、そのため分析を断念せざるをえなかったのである。

［２］不潔視からの分析

「清潔社会―清潔価値→不潔視」という図式の検証は断念したが、浮浪者に対する大学生の不潔

視より大学生を分類し、不潔視度の高い大学生にどのような特徴が見受けられるかを調べてみた。

まず大学生を、浮浪者の入浴、歯磨き、洗髪、下着の取り替えについての意識より、「不潔視高層」「不潔視中層」「不潔視低層」に3分類した。そして「浮浪者との接触と回避」「怠惰視、恐れ視との関連」「浮浪者の浮浪生活期間の想定」「浮浪者への嫌悪・反発と排除」について分析を試みた。

分析結果の詳細は調査報告書『大学生'87 ナウ－大学生の浮浪者観の調査研究－』（大正大学社会学科「大学生 '87ナウ」調査研究グループ、代表：矢島正見, 1988年1月刊）を御覧頂きたい。ここでは紙面の関係上、分析結果のみ記させていただく。

分析の結果、以下のような結論が得られた。

① 浮浪者を不潔視する度合いの強い大学生は、男女とも、浮浪者を避ける傾向が強い。しかもその傾向は「軽蔑的回避」もしくは「嫌悪的回避」とでも呼べるものである。したがってこれより、「不潔視→軽蔑的・嫌悪的回避」という図式が成り立つ。

② 浮浪者を不潔視する度合いの強い大学生は、浮浪者を怠惰視する度合いも、恐れ視する度合いも高い。このことは特に女子に当てはまる。したがってこれより、浮浪者への不潔視と怠惰視および恐れ視とには関連性があることが想定される。

③ 浮浪者を不潔視する度合いの強い大学生は、男女とも、浮浪者の浮浪生活期間をより長く想定している。つまりここにおいても、実際の浮浪生活期間より長く想定しているわけである。したがってこれより、「不潔視→浮浪者に対しての認識のずれ」という図式が成り立つ。

④ 浮浪者を不潔視する度合いの強い大学生は、男女とも、浮浪者に対して嫌悪感・反発が強く、しかも排除性が強い。したがってこれより、「不潔視→浮浪者に対しての嫌悪・反発と排除」という図式が成り立つ。

⑤ これらのことはまさに第4章にて検証した結果と同じではあるが、ただしここでは残念ながら、「清潔社会―清潔価値→不潔視」という文化構造レベルにまで分析を深めることはできなかった。

終章　残された課題

［1］研究課題

要約については既に各章にてまとめてあるのでそれを見ていただくことにして、ここでは課題についてのみ記させていただく。

浮浪者を一般の人びとはどのように観ているのかということを実証的に知ることは、きわめて有意義なことと思える。それは、浮浪者の社会的位置を理解する1つの糸口でもあり、警察や行政などの浮浪者対策を理解する1つの糸口でもある。さらにそれは、浮浪者観を形成する構成要素を位置づけ、それらの背後にある社会的価値を見い出すことにより、その病理性を指摘しうるものであるし、また浮浪者へのラベリングを文化構造のレベルより考察する資料を提示するものである。

今回の調査は大学生のみの調査であった。したがって、あくまでも大学生の浮浪者観であって、人びとの浮浪者観ではない。そこで今後、一般の人びとを対象とした調査が必要である。また、今回の調査では調査票の不備などにより、十分な分析ができなかった。再度調査票の練り直しが必要である。

しかし、こうした課題を残しながらも、今回の調査は一応の成果を挙げたし、この種の調査の先駆けとして、それなりの意義があったものと思われる。

［2］対策課題

対策課題とはいえ、ここでは具体的な対策を指向するものではない。むしろ社会的背景を問題にする。

第1に「清潔社会」「勤労社会」「秩序社会」を問題にする。人びとの清潔性、勤勉性、秩序の維持性が社会に対して大きな順機能となっていることは疑いのない事実である。しかし、人びとが清潔であり、勤勉であり、秩序を維持しようとするがゆえに出現する問題もある。その1つの具現が浮浪者観であり、浮浪者へのラベリングである。したがって、「勤勉は良いこと」「清潔は良いこと」「秩序は良いこと」と100パーセント疑うことのない価値意識は、時に社会にとっては逆機能として作用する、ということを認識していなくてはならないであろう。

第2に、浮浪者の実態と浮浪者観とのずれを問題にする必要がある。実態から離れて「観」が先走りするのは危険なことである。ラベリングも、偏見も、差別も、この「観」と実態との乖離に基を発している。したがってこのずれを無くすことが必要であり、そしてそのためには、①浮浪者の実態調査、②浮浪者観の調査、③実態と観のずれの把握、④ずれの克服、という対応手順がどうしても必要なのである。

（付　記）

この論文は、先に記した調査報告書『大学生 '87 ナウー大学生の浮浪者観の調査研究ー』に基づいて記したものである。この調査に参加した14名の学生諸氏に、紙面を借りて感謝の意を表したい。

（1990. 4. 16 受理）